

自然觀照・自己心境を俳句に託して（「森鷗外と夏目漱石の俳句」(1)）

— 森 鷗 外 —

大 星 光 史

鷗外の死

鷗外の遺言は、唯一の親友といふべき賀古鶴所が筆記した。

「余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリコトニ死ニ臨ンテ賀古君ノ一筆ヲ煩ハス死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍省皆縁故アレドモ生死別ルノ瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラズ書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ手續ハソレゾレアルベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サズ

大正十一年七月六日 森林太郎言

賀古鶴所書

萎縮腎と肺結核の病状による鷗外の死であったが、臨終まで意識は明確であった。

鷗外六十一歳。

長男森於菟の記録によれば、臨終せままでのうわ言は「馬鹿々々しい」の一言であったという。

病状に袴をはき、腰のあたりを両手でしっかり支え、身動きもせず正しく病臥していたという鷗外が、その心中にはなにを思っていたものか。

「宮内省陸軍省皆縁故アレド」「宮内省陸軍省ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ」石見人森林太郎として死にたい。墓は森林太郎以外一

字も彫ってはならないという鷗外の決意には、むしろ鬼気迫る自由人への憧憬の執念、過去における官界・役人生活への厳しい批判、それへの対処の仕方が窺われてならない。「何人ノ容喙ヲモ許サズ」と結ぶとき、それはさらに高まる。

大正五年四月、正式に陸軍省を退くに当ってそれ以前より、大正四年七月十八日の日記に「老来殊覚官情薄」の句の入る長詩を書いていることから、部内、いわば、官庁、役所仕事全体をも含めての面白からぬことがあったことが察せられる。

人間の個々の性情を無視して、機構として動く生活に、生涯その身をゆだねて来た鷗外は、病臥臨終に至るも袴をはき身を整える真面目規範の人間であり、同時に「外形的取扱ヒヲ辞ス」と固く遺言する人間でもあった。

「馬鹿々々しい」とのうわ言は、その形式主義に踊らされた自らの人生へのいまいましき、世間、社会への痛噴であったのかもしれない。

人生と俳句

医学博士、文学博士、軍医総監、医務局長、博物館長兼図書頭、従二位勲一等、高等官一等と、高位高官のきわみにまで達した鷗外は陸軍に入るときすでに、世俗の名譽を離れ、山中への隠遁の気持ちをもっていたといわれる。

鷗外という一個の人間の中で、『空車』にみられ傍若無人、左顧右盼、用不用、俗世間に気がねすることなく悠々進む人間の生き方や超俗の『寒山拾得』が在ると同時に、形式を重んじる家の「かじ取り」、国家の「かじ取り」としての自負、自覚、高位高官、エリートとしての意識も作用していたかと思われる。

保身、高名への渴仰と、それをひどく毛嫌うもうひとりの自分が同居した。長い間、隠栖、隠遁の人を調べて来た筆者などにとっては、高位高官を実際にきわめつくした鷗外は、何といってもやはり真の隠者からは程遠い人物であったと思えない。しかし、鷗外の心の底に根深く、隠栖への憧れめいたものが去来して居たことも、その公人としての生活からより一層強められたことも確かであろう。

行秋を物の種干す翁哉 (明治二九・一〇・一六)

一揮して妓を去らしめて虫の声 (明治三二・九・二六)

昼寐せんけふも隣のいと車 (明治三三・七・一四)

満潮に踊の足をあらひけり (明治三三・八・一〇)

雨に啼く鳥は何鳥若葉蔭 (明治三四・七・四)

最初の句は、高浜虚子への書簡に載る。晩秋と物の種子乾す老翁の世界は、毀誉褒貶、世俗をかけ離れた境涯であり、鷗外は一面この世界に心を寄せるものがあつた。

この年一月、「めざまし草」を創刊しており、三十五歳の年齢の彼には、かつての「しがらみ草紙」の如く、世の蒙を啓くといった態度、積極性はみられなくなっている。しかし、「目不醉草」であり、あくまで文学、芸術に関する目を覚まし、正論を主調せんとの気概はあつた。

一方で、この年は、俳句をつくつた数も多い。

「夕立やほつりくと石の上」もこの年の夏の作である。

この明治二十九年は、父静男の亡くなつた年である。

父は、吉次家より鷗外の祖父綱浄に望まれて婿入りし、森家の十二代目をついだ人である。オランダ医学を学び、御典医の列に加えられたが、それだけでは生活は苦しくて町医者をも兼ねた。

心のやさしい、名利榮達には恬淡たる型であつた。

森家の「気位の高」さ、平素の実力を養い、「折もあつたら立身出世しようと云ふ」激しい家系にはそぐわぬものがある。それでいて鷗外の血、その内部には、この父に対する共鳴、影響もあつたと思える。

同年四月四日、萎縮腎、肺炎腫で死んだこの父は、享年六十一歳であり、鷗外もまた後年、同年齡、殆ど同じ病名で没している。

高位高官をきわめた息子と、名誉心にはきわめて疎かつた父と。この二人の死に臨む態度には、自ら異なるものがあつたに違いない。ともあれ鷗外のこの年の句には、他の句にはみられぬ無常感、異質なものが漂う。挙げてみると、

憶亡父

俵やつくばひ覗くあきの水 (明治二九・九「めざまし草」まきの八)

螳螂の夫は妻に喰はれけり (明治二九・九「めざまし草」の九)

螳螂の斧を引きゆく小蟻哉 ()

行秋やで、むし殺の中に死す (明治二九・一〇「めざまし草」まきの十)

行秋や案山子はくどにくべられぬ(明治二九・一〇・一六)

秋水の中に亡き父の俤を這いつくばって覗く鷗外には、幽明を異にする悲哀感を、つくづくと感ずるものがあった。かまきりの妻に男としての役目果てれば子孕む栄養価に喰われてゆく夫。その螳螂の武器ともいべき斧を引き摺ってゆく小蟻……。いずれもそこには痛々しい死がある。蝸牛は殻の中に死し、案山子は、かまどにくべられる。

もたれあひて花乍ら菊の枯れにける(明治二九・二「めさまし草」まきのI)

山茶花のこぼれけり菊の枯るゝ上に()

野分する夜寺鐘樓へ上り行く(明治二九・一〇・二〇)

枯菊

菊枯れて梔黄ばむかき根かな (明治二九・一二「やまと琴」第五調)

菊枯れてしばし花壇のわかれかな ()

秋とはいえ、*「枯菊」*をこの二十九年度十九句の内に丹念に詠み込む。

こうした句の間に置かれた一つが、「行秋を…」の句である。己に世俗の表裏、人間の死を見きわめて来た鷗外にとって、世俗を超えてひっそりと、何がしかの種子干しに専念する翁の生き方は、気持ちの上で惹かれるものがあった。

「一揮して…」から「雨に啼く…」までの句は、明治三十二年から三十四年にかけての句である。

鷗外の句で最初にみられるものは、明治二十六年で、句作は大正六年までつづく。年によっては、一句も作らない年があり、また一句にとどまったりする。

小説、評論、漢詩、和歌、翻訳、近代詩と鷗外の仕事の幅は広く、むしろ俳句にも手をのばしていることが不思議でさえあるが、中でも明治三十二年から三年にかけてその句数は圧倒的に多い。

何故であろうか。

小倉の時代

明治三十二年六月八日鷗外は、軍医監として、第十二師団軍医部長に任命された。第十二師団は九州の小倉こくらにある。

中央の近衛師団の軍医部長で軍医学校長でもあった身分から考えると、この処置は明らかに左遷であった。

ドイツ留学以来の上司で、元医務局長の石黒忠憲ただのりと、鷗外の先輩であり親しく交際して来た時の医務局長小池正直の鷗外への反感によるものであったらしいが、このことは、鷗外に強い衝撃を与えた。

辞職を決意し、親友賀古鶴所に辛くも思い止まらせられた一面もある。

小倉赴任の頃、鷗外は、「隠流」かくながしなどという号を用いたことがある。余程不満だったものであろう。

「予は一片誠実の心を以て学問に従事し、官事に執掌おつようして居ながら、その好意と悪意とを問はず、人の我真面を認めてくれないのを見るごとに、独り自ら悲しむことを禁ずることを得なかつた」とも、「鷗外漁史はここに死んだ」ともする。

しかし、心身健やか、「閑情雅趣」の好機を得たことは、かつて書生、留学生であった時代以来のものであり、「人の上座に据えられたつて困りもしないが、下座に据えられたつて困りもしない」そんな心境、修行の場としてこの逆境を考える。

自分の気に入ったことを自分勝手にやっているのであり、「余所よせの人が、私の事をさぞ苦痛をしているだろうと思つてゐる時に、私は存外平気でいるのです」の心のゆとり、余裕を示そうとする。

小倉時代に前の夫人登志子と別れて十一年に及ぶ独身生活にピリオドを打ち、大審院判事荒木博臣の長女志げと結婚、観潮楼で結婚式を挙げている。

鷗外四十一歳、志げ二十三歳、両者とも再婚となる。

三十八歳から四年間に及ぶ小倉時代は、いわば、鷗外の句作、自然への観照がもっとも冴えたときでもある。

「一揮して妓を去らしめて虫の声」の句は貝原益軒の墓を訪れ、その夕べ、西公園鐘美亭で一献を傾けた際の句である。

袖そでの港は弓のように眼前に横たわり、博多の人家は、紅い瓦白壁と数珠玉のようにキラキラと波打ち際に立ち並ぶ。

夜に入ると身辺皆蟲の声である。

陰曆の二十一日であり、月の出も遅い。この一瞬を鷗外は、いとも愛した。

芸妓の賑わい、酒宴の歡を退けて、蟲の声、自然に没頭しようとする鷗外の姿勢には、むしろ新しい心境、境涯への積極的な動きが看取れる。

それ以前に小倉へ赴任してから間もなく三ヶ月経てからの句に、

夢ならず蚊張近く雨の音がある。

八月三十一日、京都豊津から来た知人と長浜に遊んだ。近くの旭町で火花が上がるといので、あたりは立錐の余地がない程の混雑のしようである。

夜、床に就いたがなかく眠りに入れない。その時の句がこれである。

折から降る夜中の雨に夢結べぬ鷗外が、果して気になったのは降り注ぐ雨の音のみであったであろうか。

かつて中央、宮中近衛師団の軍医部長であった鷗外にとって、この片田舎の九州の地で聴く夜雨は、あの中国の詩人の都で栄華を誇ったのち晩年草庵で老骨を横たえる悲しさ、奈良平安を通じて、太宰府に左遷され中央政府を恋う高位高官の宮廷人、そんな心境にも似通うものがなかったものか。

先輩である小池正直は、「石坂局長がいずれ休職となるが、その後は、自分と菊池と君とで同時に軍医監に昇進し、三人で陸軍軍医の仕事に貢献しよう。局長の椅子は、先輩である自分に先ず与えてほしい云々」の相談を鷗外にもちかけた。

小池は陸軍軍医監となりさらに陸軍局医務局長に就任した。つづいて軍医監には、菊池と並んで小野敦善に任が下った。何故か鷗外は退けられた。しかも九州に追いやられる。憤怒と絶望が鷗外を襲い、心中悶々たるものを抱きながらこの辺地九州へと彼は落ちてゆく。

「夢成らず」は単なる眠りの夢ではなく、中央にあって軍医監、さらには医務局長、総監とすすむ栄耀栄進への夢。半ばにして挫折したその夢への痛恨、哭声であったかもしれぬ。

明治三十二年、いわば、鷗外の小倉滞在中のすべては、ある意味で、世俗を超越しようとしながら、世俗の官吏社会の栄達が気になる妙に矛盾した時期ともいえる。

自分の心を整理し、この境遇を自己鍛練、修練の場と化そうとした。その意味で積極的に自然に没入し、敢えて人事、人間臭から去ろうとする。俳句はその点もっとも適した文学であり、この期に鷗外の句が圧倒的に多いのも納得できることである。

「昼寐せんけふも隣のいと車」の句を作った日は、丁度、日は晴れながら雨が細かく降っていた。

常日頃隣家から絶えず聞える糸車に、それを繰る人はいかなる人かと思ひやる。聞けば、その家の親戚の女が仮寓し、その女の片眼は盲目だという。

彼は、こんな庶民の世界に興味をもち、利害で明け暮れし、策謀と対立をくり返す役人世界に愛想を尽かし遠ざかろうとする。

明治三十三年八月十日、夜の長浜で踊りを観た時の句が「満潮に踊の足をあらひけり」である。

勿論鷗外が人々と一緒になって踊をしたわけではない。

世の憂さも辛さもことごとくに忘れ果て、踊に熱中し、その後、砂浜に寄せられる満ち潮に足をさっぱりと洗って晴ればれと家路につく男女。そんな生活に鷗外は自分にはないもの、ふと羨望にも似たものを感じる。それでいて自らも何かその印絆纏、三尺帯の女子、手拭でもって顔を隠し、股引もなく腿も露わなそんな女や男の群に、強く惹かれるものがある。女を奪って妻とするといった土地の風習も都会人であった鷗外には面白いと思う。

人為を去った野性野趣が地方には残る。

鷗外は小倉にあってもその職務上、衛生隊演習等で各地を訪れる機会が多かった。

「雨に啼く鳥は何鳥若葉蔭」の句も、午前七時に行橋の地を出発、正午に近く七曲嶺を越え、隧道を目の前にこの句をつくったらしい。周囲は自然にかこまれ、若葉と小鳥たちの囀りに初夏が鷗外をはじめとする演習兵をつゝみ込む。

鷗外の心に自然への讃歌、世俗の桎梏を倦むもの、小倉左遷への件を忘れ去ろうとする意志的なものが働き、少なくとも脱却するにはこの自然、それを表現するにもっとも適した俳句の世界が親しく身近かなものと思えたに違いない。

この頃の作品をさらに幾つか上げてみると、次のような句がある。

縁の戸やことりく雪のよもすから(明治・三三・一・一六)

日一日障子の外の霰かな(明治・三三・一・一四)

海きらく帆は紫に霞けり(明治・三三・三・二・一六)

筆とれば若葉の影す紙の上(明治・三三・五・九)

山と海のおひだに黄なる麦の秋(明治・三三・六・二)

強力の毛脛にあたら清水哉(明治・三三・六・二)

かさなるや山々の峯雲の峯(明治・三三・六・七)

打倒すやうに犬臥す暑さ哉(明治・三三・八・三)

鬼灯をやると呼びし娘哉（明治・三三・二・七）

口髭の一すぢ白し今朝の秋（明治・三四・九・一）

当時鷗外は、噂話や山東京伝の狂歌にしきりと興味を示したりする。

一晚中雪の降る音に耳傾け、終日端坐、障子の外の霰を聞きながら、世間の噂話を面白いと思う。

時には会議等で上京。帰途、明石で「海きら〜」の句を詠んだりする。

全てその注目する所は季節の推移や自然の風物にある。生臭い人事、昇進、人間関係はあえて避けたいおもいがある。

例えば、こんな句もある。

九日。終日家にありて新米の書籍を閲し束牘を修む。

筆とれば若葉の影す紙の上

の句が生まれたりする。

読書の閑をもっぱら楽しむ。

軍務のため旅もよくした。

「山と海」「強力」「かさなる山々」の句もその一情景を叙したものである。

犬や小娘の動作にも鷗外の目は届く。それに、句の題材としても最適であった。

鷗外の句作りは、明治三十四年の「口髭の」の句とその三日後、常磐橋の上から眺めての景、

稲妻を遮る雲のいろの濃き

を最後に、明治三十八年六月一日の長男森於菟宛の書簡に見える句までつくられていない。すでに四十歳。この頃、ようやく小倉赴任のショックから立ち直り、一種の諦観を、自然観照、俳句づくりからくる境遇の安定感で得ていたのかもしれない。

翌年一月四日、東大助教授医学博士岡田和一郎の媒酌で、東京の観潮楼で結婚式を挙げる。念願の第一師団軍医部長となり、帰京したのも、その年の三月である。

すでに心の安定と共に、慌しい世俗の雰囲気もまた鷗外の身边を包んでいた。

以前のような句づくりは、鷗外の生き方から消えてくる。

鷗外の俳句づくりを考えると、その多忙な職務境遇からくるものもあるが、公私ともに盛運の時には、その句は皆無に近く、衰運、悲運のときはその数を増すという奇妙な現象がある。

多忙過ぎるか、悲運のときは、当然のことながら文筆活動も鈍ったようである。その分を俳句に寄せていたのかもしれない。

反動機関への諷刺

明治二十六年十一月、陸軍軍医学校の教官から三十二歳の若さで鷗外は軍医学校長となった。陸軍衛生会議議員を兼ね、十二月には中央衛生会委員となる。

それ以前、明治二十一年九月、ドイツから帰った二十七歳の鷗外は、陸軍軍医学舎の教官となり、陸軍大学校の教官を兼任、しきりに医学上の論文を発表した。

西欧医学の紹介、和漢方医復活の反対、既成のボス支配の医学界、その主勢力への論戦を挑んだものである。

とくに軍医監である石黒忠恵ただのりなど医学界を牛耳っている長老のあつまり日本医学会を批判し、反動者ときめつけ、山谷山楽堂主筆の『医海時報』を反動機関として徹底的に攻撃しめいた。

戦闘的であり、純粹な情熱、正義に燃えるものがあつた。

医学界の主勢力、現勢力から外れた立場を持っているだけに論は痛烈を極めた。

文芸でも明治二十二年『於母影おぼかげ』で、また原稿料五十円を基金に「しがらみ草紙」を発行し、文芸上の意見主張を開陳した。文学の流れが誤った方向へ流れぬようせきとめるとの責任感があり、評論は論争的、戦闘的である。坪内逍遙との間にかわされた「没理想論争」などその一つであつたかもしれない。

二十六年十一月、陸軍軍医学校長となるまで鷗外には、かなりの句がある。

反動機関のいはく伝染病研究所建設地問題は何故に中央衛生会に諮詢せざる

助言をかしあつさに碁の手ゆるむ（明治二六・八）

北里柴三郎が辞表

濁されたあともしみづは清水かな（　　）

反動機関は今さらに芝区某等が上を云々す

踏出した先やさつきぬかり道

将悔闘

蠅うちのけがれは血ではなかりけり（明治二六・九）

冷笑

冷笑で四拾九手ある角力かな（　　）

いずれも『衛生療病志』に「傍観機関」の欄を設け、論じ抗議した文中にみえる句である。

『衛生療病志』は、鷗外が、二十二年、日本の実験医学の確立をめざして『衛生新誌』を創刊、さらに、速成医の危険を激しく説くあまりに『東京医事新誌』の主筆を務めた鷗外が、みずから『医事新論』を創刊する。この二誌を四年後合併し、『衛生療病志』と改題したものである。

「反動機関」「北里柴三郎の辞表」……「冷笑」等と、現実の人間関係、医学界の醜悪事を生々しく摘発する。

「助言をかし」「しみづは清水かな」「ぬかり道」「蠅うちのけがれ」四十八手ならぬ四十九手目といえる「冷笑」の効力と、これは闘争と反目、皮肉、批判に満ちたものである。

俳句は、その語の短さゆえにより痛烈な非難とトゲ、暗喩を秘める効力を持つ。

俳句をつくった初期の頃の鷗外には、この短詩型の文学は、こうした批判の手段、武器の一部として用いられたといえる。

俳句と心境

鷗外の明治四十五年に書いた『俳句と云ふもの』では、こんな記述がある。「俳句と云ものを始めて見たのは十五、六歳の時であったと思ふ。（略）俳諧の本は、誰やらが蕉門の句を集めた類題の零本で、秋冬の部丈があった。表紙も何もなくなつてゐて、初の一枚には秋の句があつたのを記憶してゐる。さう云ふ本を好奇心から読み出した。丁度進文学社と云ふ学校で独逸語を学んでゐた片手間であつた。

(略) 俳句に類題の零本を読んで面白いと丈は思つてゐた。分かると思ふ句と、分からぬと思ふ句とがあつた。その分かると思つたのが、ひどく見当違であつたことは、今から回顧して見ても思はない。生利で物は早く飲み込むことの出来る性であつたらしい。

秋風や白木の弓に弦張らん 去来

と云ふ句がひどく気に入つて、こんな句がして見たいと思つた。その後俳句を少しして見たが、かう云ふ向きの句は一つも出来たことがない。何事によらず、自分の出来ない方角のものに感服してゐて、それが出来ずまひになるのが、性分であるらしい。」

明治四十五年一月一日発行の雑誌「俳味」(第三卷第一号)に鷗外の署名で掲載されたものである。

四十五年以降の鷗外の俳句の数は十句にも満たない。

「秋風や白木の弓に」の句にとて惹かれた云々の口ぶりであるが、この句にあるものは、冴えと張り、それに澄み切つた心境が鷗外を魅力づけて居たものに違いない。いいかえれば、鷗外の見方の中に、俳句とは、それらを表現するものであり、少なくともそこに原点理想があるものとの考えがあつたと思える。

「生利で物は早く飲み込むことの出来る性であつた」鷗外であるが、小説、評論、翻訳類と異なり、自己を表現する筈の俳句では、「生利」だけでは到達し難い俳句の味、心境の深さも感得していただであらう。

明治四十三年七月二十一日の日記の中で、「あそびを俳書堂に渡す」の一文がみえる。その前日には、「あそびを校し畢る」とある。「あそび」とは、俳句を意味していたかと思える。これが単なる「遊戯」の文学でなく、そこに「俳諧」古来からの伝統をふまえた「遊び」を意識するものがあつたに違いない。それにしても鷗外には、この短詩型文学にやはりある種の気楽なもの、心おきなく接しつくり得る文学のイメージ、それだけに自己の近況、心境を陳べ切ることになる文学という気分もあつたに違いない。「かう云ふ向きの句は一つも出来たことがない」「自分の出来ない方角のものに感服」の一文が語るものは、鷗外ほどの才人、作家であれば、虚構となれば、いかようにも「秋風や白木の弓に」の句に匹敵、以上のもののはつくり得る、見せかけのものであれば不可能事はない、しかし、心の「遊び」、それゆゑに自由気ままに自己の真実をすなおに定型・十七文字にする、それは心境の向上であつても、技巧、修辭のみであつてはならないとの考えが、こうした俳句そのものへの鷗外の漠然とした定義であつたのかもしれない。

戦争と日記俳句

明治三十七年日露戦争勃発と共に、四月満州へ出発する。この頃から『うた日記』をつけ始めた。詩、短歌、漢詩、俳句等をこまめにしるしたものである。

俳句は、

起重機や馬吊り上ぐる春の舟

春の海を漕ぎ出でて明かす機密哉

春の海やおもちやのやうな遠き舟

で始まる。

四月二十一日字品での作である。

句は非常に多い。

朧夜や精衛の石ざんぷりと

五月二日鎮南浦で旅順閉塞隊の快挙を聞いての句がある。

鳥の巢をいたわりて木を伐らせけり

陽炎や草なき岡の小さき廟

五月十五日楊家屯で作った。

瞑目す畦の馬棟の花のもと

五月二十七日南山での作。

以下幾つかしるすと、

赫塗まはぬりの廟を囲める若葉かな

ならび立つ鐘楼鼓楼春の風

桃ももいけて赤しよき衾とぎぬに胡僧こそう坐す

(尖山子)

(奉天)

(〃)

兵站や積荷阜す桃の村 (栄家屯)

夕立に沐して帽を弾きけり (祝家屯)

涼みけり実のまだ青き梨のもと (古家子)

米足らで粥に切りこむ南瓜かな (沙河)

ことごと前搔く馬や朝寒み (遼陽)

埋火の燃えつくしたる窪かな (大東山堡)

あやめ茸く家にゐのこを屠りけり (慶雲堡)

爆破せしあと磊磊と冬の石 (二竜山)

いずれも、戦争という異状事態の中で、詩人鷗外の見た中国の風物、戦争詩である。

『うた日記』の句は、その後、高浜虚子に目を通してもらい『うた日記』の句として出版された。

『観潮楼詩話』で、鷗外は「いや私の俳句はほんの素人の――余技に過ぎないんで」という。

「余技」意識はかえって鷗外の本音、真実の声を吐露させるものであったともいえる。

「肉体の忙しい」ときは、いか程忙しくても作れるが「精神の忙しい時は駄目」と鷗外はいう。

心のユトリ、精神的なものを鷗外はこの短詩型の中に見ようとしていたともいえる。余技であり、リラックスした表現形式ゆえ鷗外の胸の内がよりの確に盛られたともいえる。

こうみてくると、鷗外の句が多く作られたのは、明治二十六年の『衛生療病志』『棚草紙』による三十歳過ぎの頃。これは時代的にも医学、文芸ともどもに新気運を望む活気に溢れた時代であり、つづいて父の死の明治二十九年。この年一月は「目不醉草」を創刊、文学への再出発を期していた。

明治三十二年は小倉左遷があり、以後の四年間は、逆境不運のなかで鷗外はかえって、精神的余裕、充足感を覚えていた。その後日露戦争による二年間の戦争体験、これが『うた日記』として実を結ぶ。

第二軍兵站軍医部長として従軍した鷗外は、肉体的には労多かつたであろうが、精神的には故国で役人として人間関係に悩み、立身出世、社会生活を営むより、単純にして且つ自然に親しみ得るの余裕を感じていたものかもしれぬ。

晩年の句

大正に入ってからの鷗外の句はわずか九句に過ぎぬ。

大正二年八月十六日の句に、

虫干しや甘んじてなる保守の人

の句がある。

田中義一のために色紙にしるしたものである。

鷗外はよく「柁をとる」という言葉を好んだ。嫡男、家長として、また、嫁と姑の間をたくみに柁をとり、さらには国家の柁とりにもと。

鷗外に『仮面』という戯曲がある。

「高尚な人物は仮面を被つてゐる。仮面を尊敬せねばならない」との一文は鷗外の諸作品・小説、ひいては、生活信条にも言えたことだったのかもしれない。封建制、天皇制、藩主、君主、国家、役人生活がその仮面を代表する一つであったと見て取っていた。冷徹で頭脳明晰な鷗外にとって、「胭脂を舐めた蛙が腸をさらけだして洗ふやうな」ことは堪え得ぬ醜悪事であり、それだけに、形式、信仰、慣習、約束ごと、さらには、儀式、礼儀等も欠くべからざるところの「緞帳芝居」であると言及している。

社会秩序をつくりあげているその虚構性をよく見抜いていた。

これらを踏まえた上で、先の句「甘んじてなる保守の人」の句の解に当たるとき、鷗外のころもよく伝わるような気がする。

保守の人として生きる構えは、全てのからくりを見知った上で鷗外自身の処世術であったともいえる。

鷗外の句で最後にみえるものは、大正六年六月二十六日の、

稲妻は矢口の言の光かな

である。

その前年三月、母峰子が歿し、四月永年務めた陸軍部内に何か面白からぬことがあったらしく退官している。五十五歳のときである。有用無用、優劣を論ぜず、一野人として高官権威より無官の知足に甘んじたいそんなおもいに駆られた時期である。

だがこの「稲妻は」の句の年の十二月、帝室博物館総長兼図書頭に任ぜられた。彼にとって無官、役所仕事からの開放はついに最後まで達成でき難い運命にあった。

退官後も繁務多忙である鷗外は、六月二十六日、この句をつくった日の午前は宮内省に行っている。よく晴れたその日、米谷吉次郎なる人物が無駄口をたたき出した。それについて皮肉ったのがこの句である。

むしろユーモアのある句であり、稲妻、閃光から始まる雷鳴、降雨の激しさを、米谷のこれから始まる冗舌に予感するとの譬えであり、揶揄としたものであろう。

俳句への軽いタッチは人生を渡ってゆく上に必要な友としての親しみを、この小文学の諸作品に見せている。それは、小説、評論には決して見せぬリラックスした姿勢態度である。

先の作品以後、鷗外の句はどこにも見られない。

日記も、天候や事項を簡単に記すのみで文学活動は停止する。

六十歳『帝諡考』が成り、ついで『元号考』に着手したが、すでに下肢に浮腫があらわれ、明らかに腎臓病の徴候が顕著となる。翌年

大正十一年「萎縮腎」と肺結核により、七月六日賀古鶴所に遺言。九日午前七時、自宅で歿した。